

都道府県名

長野県

## 学校の概要

学校名	松本市立清水中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	4	2	13	20
生徒数	121	117	127	7	372	

## 研究の概要

## 1. 研究主題

## 自己学習力を育てる授業の創造

## 2. 研究内容と方法

## (1) 実施学年・教科

授業公開した学年・教科

・1年生・数学・英語

生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため

研究した学年・教科

・全学年・全教科

フロンティア校として、すべての学年・教科で取り組んできた

## (2) 年次ごとの計画

平成14年度

## テーマ

「生きる力」をはぐくむ「豊かな心」の育成と「確かな学力」の向上

## 研究の見通し

「生きる力」を「豊かな人間性に支えられた問題解決力」ととらえる。そして、「豊かな心」及び「確かな学力」のとらえを明確にし、その育成と向上を図ることによって、「生きる力」がはぐくまれると考え、テーマ実現のための研究の方向を定める。

## 研究内容・方法

## 「豊かな心」の育成

教育活動全体を通じて行う道徳教育の充実

・教師と生徒、生徒同士が互いの心を開いて語り合える人間関係づくり

・道徳教育の要である道徳の時間の充実

豊かな感性を育てる情操教育の充実

・喜び、共感、感動がもてる学習の創造

体育・健康に関する指導の充実

・一人一人の生徒が充実した学校生活を送れるための心身の健康づくり

・保健指導、安全指導、給食指導など多方面からの指導の充実

## 「確かな学力」の向上

必修教科の学習での魅力ある授業展開

・教師主導型でなく、生徒が活躍する授業

・問題解決学習による問題解決力の育成、つける力の明確化と基礎・基本の徹底

個に応じた指導のための少人数授業の工夫・改善

・数学科におけるよりよい少人数授業のあり方

評価規準の作成と評価方法の工夫・改善

・本校の具体的な評価計画を作成

・評価のための評価でない、評価を生かした指導の改善

伸びる力を一層伸ばす選択教科の学習の充実

・補充的な学習におけるカリキュラムの改善（基礎・基本の徹底）

・課題学習、発展的な学習における教材の開発（問題解決力の育成）

## 平成15年度

### テーマ

自己学習力を育てる授業の創造

### 研究の見通し

「生きる力」の育成を視野に入れながら、生徒が課題やねがいをもって、自ら学ぶ姿を大切に研究を継続する。

本年度は、まず生徒の自己評価に着目した。自己評価は、「わかった・できた」という喜びの実感、「ここはわかった」という確認、「ここがまだわからない」という認識、「次はこのようにしよう」という修正など、次への学習を発展させていく力となる。また、その自己評価を教師が把握することは、教師自身の指導の見返しと新たな指導を生み出す源となる。

こうした「自己評価」という視点を加えることで、生徒の学びの姿をとらえ直し、これを「自己学習力」とした。さらに、自己評価を生かした指導や25分授業の導入等から、その育成を一層図ることを願っている。

### 研究の内容・方法

- 生徒が生き生きと活躍する 魅力ある授業展開
- ・問題解決力を育成する単元・題材展開
- ・伸びる力を一層伸ばす選択教科の工夫
- ・学ぶ楽しさを感じることができる総合学習
- 個に応じた指導のための少人数授業のより一層の工夫・改善
- ・より効果的な少人数授業形態の見極め
- ・25分授業の効果的な展開の工夫
- よりよい学びを育てる評価のあり方
- ・自己評価カードの工夫
- ・生徒との評価規準の共有化
- ・生徒の自己評価を生かした授業展開

## 平成16年度（案）

### テーマ

自己学習力を育てる授業の創造 ～生徒の自己評価する力を高めることを通して～

### 研究の見通し

評価は、他からの評価（教師・家庭等）、相互評価（生徒同志等）、自己評価に分けられる。生涯学習を目指すとき、自ら学ぶ力を支えるのは、自己をより確かに評価しながら自己を理解し、修正や創意工夫を加えていく力である。他からの評価や相互評価を自己評価する力を高めていくための手段と考え、自己評価する力を高めていくことで、自己学習力を伸ばし、確かな学力の向上を図ろうと考える。

### 研究内容・方法

- 自己評価する力を高めていくためには
- ・教師が本時でつける力（評価規準）を明確にする。
- ・目標に対する自己評価を可能にしていくためのさらなる工夫。
- ・一時間の授業で生徒が課題をしっかりと把握し、主体的な追究をすることが前提。
- ・日々の授業改善という側面も大切にする。

他 これからの研究で見極めていく。

## (3) 研究推進体制

9教科会を3つの連合教科会にし、研究チームを編成した。月に2回、研究会を開き、研究主題実現のために、教材研究や授業改善のための話し合いを持った。また、各チームそれぞれに研究授業を計画し、そのための研究会も何回か設け、研究の実証としてその成果と課題が、日々の実践に生きるよう進めてきた。

さらに、研究推進委員会も設け、各チームの研究を推し進めたり、集約したりしながら、教科主任会とも協力して、より積極的に推進してきた。

## 平成 15 年度の研究成果及び今後の課題

### 1. 研究成果

#### 25 分授業・自己評価カードを通しての K 生の姿 (数学科)

月・日	コメント
9/8	真剣に取り組めた。 でも、 $\frac{3}{2} = 1.2$ とか $\frac{2}{2} = 1.8$ とか、 分数の問題がわからない。
9/18	しっかり聞けたけど、やり方が確実でない。 よくわからない。教えてください。
9/22	$\frac{2}{3} + 2 = \frac{-7}{4}$ のやり方がわかった。 やり方になれると計算するのが楽しくなった。

等式の性質を使って、方程式を解くことを学習した。整数の範囲では、解くことができることを確認した K 生であったが、自己評価にもあるように分数の問題は、まだ自信を持って解くことができなかった。

左記は、50 分授業の時の自己評価であるが、この間の 2 回の 25 分授業で教師は、K 生への個別指導の徹底を図った。ドリル学習を積み重ねた結果、分数の問題の理解も進み、より難解な問題も解くことができ、わかる喜びを得ることができた。

#### 音読指導の効果 (英語科)

月・日	音読回数	コメント F 生
12/9	8	late の使い方がわかった。
12/13	7	発音がわかった。where + is を忘れない。
12/16	5	しっかりノートがとれた。 whose の使い方がわかった。
12/20	10	know のことがわかった。いっぱい読めた。

効果的な音読ステップを工夫し、25 分授業などで、音読指導の徹底を図ってきた。音読のステップを取り入れた授業の前と後で、どの程度まで単語知識の深まりが変わるかどうか、調べてみた。テストの結果は、以下の通りである。

#### < 事前 >

平均 313.0  
標準偏差 81.2

#### < 事後 >

平均 335.8  
標準偏差 79.5

### 2. 今後の課題

上記 2 つの事例からもわかるように、25 分授業をうまく活用して、ドリル学習などを積み重ねることで、基礎・基本の徹底が図られてきている。しかし、形態の工夫にとどまることなく、その授業展開や個に寄り添った指導のあり方を研究していく必要がある。

また、本年度は自己評価に注目し、自己評価カードを工夫したわけであるが、自己学習力の育成を図るために、生徒の自己評価していく力を高めていくことが、今後の課題となる。

#### 学力把握のための学校としての取組

- ・ CRT を 4 月に実施

来年度 4 月にも実施し、その結果を考察し、今後の指導に役立てていく。

#### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

フロンティアスクールとして、11 月 11 日に研究発表を行った。英語・数学の 2 教科の 50 分授業と、本校独自の取り組みである英数の 25 分授業も公開し、研究会を持った。

また、県外からの視察を積極的に受け入れ、本年度は、2 回フロンティアスクールとして視察を受けた。今後は、こうした研究を他教科にも生かし、全教科公開につなげていきたい。

~~~~~  
次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】      ☐ 15年度からの新規校      ☒ 14年度からの継続校

【学校規模】      ☐ 3学級以下      ☐ 4～6学級  
                     ☐ 7～9学級      ☒ 10～12学級  
                     ☐ 13～15学級      ☐ 16学級以上

【指導体制】      ☒ 少人数指導      ☒ T・Tによる指導  
                     ☐ その他

【研究教科】      ☐ 国語      ☐ 社会      ☒ 数学      ☐ 理科  
                     ☒ 外国語      ☐ 音楽      ☐ 美術      ☐ 技術・家庭  
                     ☐ 保健体育      ☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】      ☐ 有      ☒ 無